

梨の花はいつも損である、と僕は思う。桜の花が全盛期の舞台女優のようにはなやかに咲きほこり、人々を魅了してやまないころ、その舞台袖でひっそりと咲きはじめるのが、白い花びらをつつましくふるわせはじめるのが、梨の花のさだめだ。わかる人にはわかるいじらしさをはらんでいるもの、どうしたって、桜の、不動の人の後ろに隠れてしまう。花見を終えた人々は、だから梨の花になど関心を持たぬまま千鳥足で帰って行く。会社にいる嫌なやつやデスクの上に高く積み上げられた書類を思い浮かべ、少し憂鬱な気分になりながら。

二年前までは、僕もその中の一人だった。中堅のソフトウェア会社で働いていた。開発部に配属されており、毎日パソコンの画面と向き合っていた。前からも後ろからも、右からも左からも、キーボードをたたく不規則かつ無機質な音が行き交っていて、きつと意識しないうちから精神をすりへらしていたのだらう、ある日突然、キーボードのその音が頭から離れなくなった。帰宅してからも、カタカタカタ、ひどくうるさいのだ。総合病院の神経科で、目の前にある状況を改善しないかぎり治すのはむずかしいと言われたのを契機に、思いきって退職願を出した。二十六のときだった。

コンピューターに囲まれた生活から解放されて二、三週間もすると、幻聴は消え、朝、目覚めるたびに味わっていた虚脱感、不快感もきれいさっぱりなくなつた。かといって全治したわけではなく、パソコンを前にすると軽い吐き気にみまわれたし、蚊の羽音がまるで機械音のように聞こえ、こめかみのあたりが、あるいは後頭部が割れそうになることがあつた。さいわい、両親が梨農家だった。僕は、しばらくの間失業保険をもらいつづけながら、果樹園の仕事を手伝つた。スマートフォンによつて外界との接触を断つた社内から一転して、小高い山のふもとにあるそこは、なんていうか、僕の人間的な部分をあらゆる方法で刺激してくれた。たとえば、小鳥のさえずり。たとえば、木の葉の音。たとえば、かすかに立ちのぼる草いきれ。たとえば、踏むたびに変わる土の感触。あちこちに存在する自然の慈悲が、僕を、僕の精神を、日のあたる場所まで導いてくれたのである。

四月の生暖かい風がひとかたまりとなつて吹き抜け、それに呼応するように揺れる梨の花をぷつぷつと音をたてもぎとりながら、僕は、もう一度、梨の花はいつも損である、と思う。僕は今、花取りの作業をしている。交配樹の花を持ち帰り、花粉を採取し、めしべにつけて実をつくらせるためだ。この時期は、とにかく忙しい。じつくりと白い花々を見て楽しむゆとりがない。無事に受粉の工程を終えるまで、一日たりとも気が休まらない上、一息つくころになると、もう梨の花は、純白の花びらたちは、汚れ、しなびてしまつ

ているのだから、やはり損なのだ。健気なのだ。

そんなふうにもつかないことを考えていると、園のそばの方から喉に痰がからんだようなしやがれた父の声が聞こえてきた。よく農協関係者が肥料や資材を売りに来たり仲のいい同業者がひやかしにやって来たりするので最初はなんとも思わなかったのである。が、次第に、父の声がいつもより二オクターブほど上がったところとが引っかけかり、ちよつと近くまで行ってみようかどうか逡巡しはじめたとき、

「おい、柿生——お客さんだぞ——」と呼ばれた。

僕に来客とはめずらしい。前の会社の同僚とはすっかり疎遠であるし、唯一親交のある友人は今ごろトラックに自動車部品を載せて走りまわっているところだろう。そこに向かっている間じゅう、父が何度も「かきおー、かきおー」と急ぎ立てるので、まさか初恋の相手だろうか、などと想像をたくましくしたが、あながち、的外れでもなかった。

実に十三、四年ぶりの再会となる、幼なじみの日向子だった。しかしすぐにはぴんとこなくて、波形にうねったようなシフオンのキヤミソールを着た女性の前で小首をカクリコクリかしげている僕に、ほらほら黙ってないで、ちゃんとひなちゃんにあいさつせんかい、という父の催促によって、ようやく合点がいったのである。

頭を下げつつも口を半開きにして僕が顔を覗かしかつたのだらう、日向子は粒のそろった小さな歯をのぞかせて、

「柿生君は全然変わつたらんね！」と笑った。

僕は、なおもぼかんとしたままだった。頭がうまく働いてくれず、言葉を覚えてたての赤子のように必死で音らしい音を発しようとしているうちに、息子の寡黙をカバ―してくれているのか、父は、急ぎの用がないならうちに寄って昼飯を食べていきなさいとかなんとか言つて、要領よく日向子を家へ誘った。快活な父のおかげで終始和やかだった。ただ、僕の胸中は少し憂えていた。痛みさえ、あった。その痛みが一気にふくれ上がったのは、日向子が足もとにある大きな旅行鞆を持ち上げようとして、左側へよろけたときだった。とっさに体勢を立て直したので転倒には至らなかったものの、やはり完治していないのだなと僕は内心でため息をつき、かすかに期待していたもう一人の自分を恨んだ。そして踵を返す日向子からすばやく、視線をそらした。

*

父の軽トラに乗って——もちろん日向子が助手席で、僕は荷台である——帰って来ると、母は、しばし目をぱちくりしてから、ああ

ひなちゃんかい、ひなちゃんだね、と、ほとんど同じ意味合いの言葉で、という形容をつけ加えたいほどのよろこびようだった。

日向子の帰省を前もって知っていたのならまだしも、食卓の上にはいつもの田舎びた料理が並んでいるだけだったが、日向子はまさにこれが食べたかったのだというような歓声を上げて、苦味があるふきの煮つけを食べるとは仰々しくなすぎ、たまねぎの葉を使った卵とじを食べてはほほえみ、いちいちなにかしら反応を寄越すものだから、父も母も満足そうだった。彼女の食べっぷりを眺めているうちにだんだん昔のイメージと相重なってきた、気がつけば僕も声をたてて笑っていた。家の裏山からふくろうがほうほうと低く鳴いている。夜行性であるうが、ここらへんでは昼間から活動する生きものが多い。たいそう居心地のいい自然環境なのだろう。

日向子はいさきほど地元駅の着きタクシーを拾ってここまで来たらしい。まだ父方の祖父母のところへ帰っていないが、しかしある踏ん切りがつかなければおじいちゃんおばあちゃんに会えないのだと語った。存外明るい口振りだったものの、どこかわけありのようだった。おせっかいをやきたがる母は、それで今夜泊まるころはあるのかい？ と聞き、かぶりを振る日向子を見るやいなや、じゃあうちに泊まっていったらいいわ、と言いつ出した。ちょうど二階の、ほら、柿生の部屋のとちやが空いているじゃない。服やら本やら人形やらで、いろいろとごちゃごちゃしているけれど、寝るのには困らないわ。日向子ちゃん、寝相がよさそうだし。ね、だいじようぶよ！

なにがだいじようぶなのかさっぱりわからないが、日向子は二、三秒考えたのち、せっかくだからお言葉に甘えちゃおうかしら、と言って、笑った。

僕は二階の空き部屋、というか物置部屋に行き、できるだけスペースをつくった。弦の錆びたギターやその付属品、アナログのテレビなどを隅へ追いやっていっていると、階段を上がる足音が聞こえてきて、いきおい背筋を伸ばす自分がいた。

「わっ、なつかしい」と日向子は言う。

「あれ？ ここに入ったこと、あるっけ？」僕はなるべく声がうわずらないよう心がけながら、聞き返した。

「うん、一度ね。このおうちの中でかくれんぼしたときに」

「よく覚えているなあ」

そのやりとりがきっかけで僕たちは昔話に花を咲かせた。あまり記憶力に自信のない僕ではあるが、日向子の巧みな誘導によって、川のほとりで水切りをしたり昆虫を採集したり人のうちのびわを勝

手に取って食べたりしたことを思い出した。それから過去に押し流されるように現在へと返ってきて、僕はソフトウエア会社を辞め父の農業を手伝っていることを話し、日向子は、実は私も、という前置きを入れてから、出版関係の仕事に携わっていたけれど半年前に退社したのだと打ち明けた。理由は言わなかったし、こちらも聞かなかった。

空気を入れ替えるために開け放っていた出窓からすすしい風が入って来た。部屋じゅうのほこりが舞い上がったせいでろう、鼻がむずむずした。日向子は心地よさそうに目を細めつつ、窓の外を見やうか。そこからは鳥影山――我が家の果樹園のある山である――がうかがえる。鳥の影の山と書いて文字どおり「とりかげやま」であるが、高さ三百メートルあまりの小山になぜそのような名前がついたのか、ふしぎでならない。あるいはそれは背の低い山ならはの、鳥へのあこがれ、なのかもしれない。

「ねえ、今でも、いる？」

日向子はなにげない感じで言ったようであるが、その問いは僕の胸にダイレクトに飛び込んできて、揺さぶった。なにが？ と僕はあえて聞き返した。日向子は鳥影山の方角を見つめたまま、自殺者よ、と簡潔に言い、それだけではまだ伝わらないとも思ったのか、「今でもあの山で自殺する人はいるの？」とうとう最後まで言いきった。

そしてさらに、これから鳥影山の頂上へ行くつもりだというのである。

「もし車でつれていってくれるのなら、とても助かるけれど」わけがわからなかった。ただ、一人で行かせるなんてあまりにも危険だと判断した僕は、従順な飼い犬よろしく、うなづくほかなかった。

長屋で梨の花の選別作業を行っている両親に一声かけてから、父の軽トラではなく、僕の、もうじき走行距離が十キロを超えようかという古い軽自動車に日向子を招待し、さっそく鳥影山の頂へと向かった。向かう途中、お互い無言だった。日向子はどうか知らないが、僕は、この山で起こったことをじっくり掘り起こしていた。

僕たちが小学生のころ、鳥影山はちよつとした自殺の名所だった。一年に何度も自殺や自殺未遂が起こり、崖の下、雑木林の中から行方不明者の遺体が発見されることもあった。このあたりの大人はたびたび臨時総会を開きあれこれと対策を論じた。何日間か見まわりを強化したり簡単に飛び降りることできないよう巨大なネットを配置したりしたが、赤色灯を回転させながらやって来る救急車やパトカーの頻度をなくすまでには至らず、ともかく村の子どもたち

に危害が及ぶことだけは是が非でも避けなければならぬ――いつ

の間にか、そんなふうに不安のまなざしは身内へ自分たちへと向けられていったのだった。ゆえに、どの家庭の子どもも耳にたこができるほど、あの山には近づいたらいけん、おそろしい魔物が棲みついておるけえな、というようなおそまつな物語を聞かされたものだが、むしろ、かえって一部の子どもたちの好奇心をそそらせたのも事実である。

当時、僕と日向子はよくつるんで遊んでいた。まだどちらにも異性としての意識はなく、そこにはたしかな友情があった。ある日のことだ。日向子が、どんな人が自殺しに来るか頂上で待ち伏せしてみようと言いだした。僕は即座にかぶりを振ったが、結局髪を短くしたエネルギッシュな女の子の強情さにはかなわず、渋々、あるいはおそろおそろの自転車を押して、一時間以上かけて、登山した。空気が澄んだその場所には簡易トイレと休憩所があり、なぜか季節はずれの鯉のぼりもあり、巨大なネットは蛇の抜け殻みたいに巻き上げられたまま放置されていて、かわりに太い杭を打ち並べてつくった柵が設けられていたが、そんなものは誰だって楽々と飛び越えてしまふだろう、と、年端も行かない僕でさえ思うのだった。

僕たちは休憩所の陰に隠れて待った。自殺者が現れるのを。日向子は片ときも緊張をゆるめることなく目を輝かせていた。僕はかなり冷めていた。冷静だった。自殺者の心理なんてわからないけれど、死ぬんだったらもつと遅い時間帯だろう、とタカをくくっていた。だから枕木を敷いた階段から一人の女性が現れたとき、信じられない気持ちでいっぱいだった。うそだうそだうそだ……、そう繰り返してぶやいていると横から日向子の手が伸びてきて、口も鼻もふさがれてしまった。一気に呼吸困難に陥った。

僕は、つまり日向子の手のひらを剥がすのに悪戦苦闘していたので、その女性の印象をはっきりと覚えていない。たしか二十代後半くらいだったと思うが、光沢のある、引き締まったレディススーツを着ていたような気もするが、わからない。ただ、木柵の前に立ち、真正面からホオズキのような真っ赤な夕日を浴びていたのを、かすかに記憶している。ときどき夢の中で再現されることもある。夕日、木柵、スーツ……。

気がつくのと、僕は叫び声を上げて逃げていた。必死で自転車を漕いでいたのである。もちろん荷台には日向子に乗せていた。鳥影山は急なカーブが多かった。右へ左へ遠心力が働いた。やがてうまくハンドルを操れなくなった。恐怖のあまり、あろうことか僕は急力ーブの手前でブレーキを利かせすぎてしまった。自転車が派手に横転した。僕はガードレールにぶつかり、意識を失った。

日向子はどういうと、ガードレールの向こうに転げ落ちてしまったらしい。らしい、なんていかにも無責任な言い方であるが、その後

のことはすべて両親の口から聞き及んだもので、やや現実味に欠けるところがあったのだ。救急車は、近くの果樹園にいた人が呼んでくれた(らしい)。僕たちはすみやかに病院での手厚い処置を受けることができた(らしい)。しかし、だ。かすり傷程度ですんだ僕とは違い、日向子は大腿部を、そして骨盤までをも複雑骨折したのである。

僕は、何度も悔やんだ。あの日のことを。自分の失敗を。今日に至るまで、ずっと。

中学二年の夏ごろだったろうか。日向子は突然、両親につれられて村を出ていった。大手電機メーカーに勤務する父親が中国に単身赴任することになり、それで彼女は母親の生家へとついていったようだった。しばらく村では嫁姑のことであるといろいろと憶測が流れたりしたが、もちろんそんなことよりも、日向子はどうしてなにも言わずに行ってしまったのだろうか、という疑問を抱えたまま、僕は、溜まりに溜まっていく夏休みの宿題をにらみつけながらベッドの上で、机の前で、部屋の片隅で、苦しんだ。いや、苦しみ、という言葉を使うのはやめよう。左足の後遺症に相当悩んでいたはずだが、日向子は一度も僕を責めなかった。会うたびにほがらかなほほえみを差し出してくれた。小学校高学年になると、男女の隔たりが邪魔してか、二人きりで遊ぶ機会は減り、中学校に上がるころにはもう学校内外問わず話さなくなったり——ものの、僕は日向子を十分意識していたし、日向子もきつと僕を意識していたはずだ。意識。それがどういった類のものであったか、正確にはわからない。

鳥影山の頂上を訪れるのは自転車事故を起こしてからはじめてだった。路肩に車を停め、僕たちは枕木の敷かれた階段をゆっくりと上った。日向子がこげやしまいか心配していると、かえって僕の方がつまづいてしまった。

視界が開けた。土や草のにおいを目いっぱいふくんだ贅沢な風が吹き渡り、まるでオーケストラの指揮者のようにそここから美しい音色を誘い出した。雲が大きく移動したため、日差しがいちだんと輝きを増した。どこからか山鳩がて——ぽうぽう、て——ぽうぽうと独特の鳴き声を披露している(風のオーケストラに加わりたいのかもしれない)。

僕たちは木柵の前まで行き縦横に広がる景色を眺めた。ずっと向こうに市街地がある。そこから少しずつ視線を引き戻す。二両編成の汽車が走っている。団地があり、工業地帯がある。田畑もちらほら見える。そして我が村に返ってくる。僕のうちが見える。日向子のうちが見える。各果樹園で白い梨の花が揺れている。強い風が吹くたびにはらはらと散っていく。小さな旅を終えて僕の視線は無事、

僕の眼窩におさまった。

「：：なにか、あったのか？」しばらくして、僕は聞いた。

僕は、なおも彼女に語りかけた衝動に駆られた。たんに返答を求めているわけではなく、また無言でいることに耐えられないわけでもない。なんていえばいいのだろう、今なら言葉が体内から心地よく出てきてくれそうな、そんな気がしたのである。

とにかくなんでもいい、なにかいおう、と思い、話の接ぎ穂を探しているうちに、真つ赤な夕日を浴びた、レディススーツを着こなしたあの女性が、浮かんだ。しかしあの女性のことを口にするのは、いささかためられた。あの女性は――ここから飛び降りたのだろうか？ いや、ただ、なんとなくここに来てみただけかもしれない。あるいは僕の叫び声に驚いて帰ったかもしれない。そう、思いたい。いずれにせよ、あまり明るい話題とはいえなかった。するとそこで、別の記憶がひらめいた。うん、これなら暗くならずすみそうだぞ、と胸のうちで吟味してから、

「そういえば、」と僕は切り出した。

「僕たちは人の命を救ったことがあった。白いペンキ一つで」紙やすりで削ったようなシャープな日向子の顎が少しだけ上向いた。

「あれは、――」

あれは、自転車事故からずいぶんたったころだった。家族の間で古くなつた長屋を改築する計画が進められていることを知った僕は、じゃあ長屋を取り壊されるまで好き勝手に使えるぞ、と考え、さっそく日向子呼び、車庫に白いペンキと刷毛が置かれていたからだろう、落書きを思いついたのである。僕は脚立から落っこちないよう、気をつけながら巨大な自画像を描き、日向子は隅の方で女の子らしく白い花々を描いた。鼻の先や首筋にペンキを付着させたままで見知らぬ男性が顔を出した。ありがとう、と言われた。唐突だった。僕たちは、ぼうつとしていた。わけがわからなかったのである。四十代、もしかすると五十になつていられるかもしれないその男性は笑つて、実はね、と話しはじめた。おじさん、ちよつと苦しいことがあつて、今さつき、すぐその山で死ぬところだったんだ。でもねえ、飛び降りる寸前で、よみがえつたの、君たちの絵が。ここを通りかかったときには、まあ、なんとも思わなかったんだけどね、ふしぎなことだね、あと一歩踏み出したら死ねる、っていう状況になつて、ふいに、君たちの絵が、このおじさんをね、感動させたんだよ。わかる？ ははっ、わかんないよね、いきなりこんなことをいわれても。ともかく、おじさん、助かっちゃった。またがんばる

よ、うん。ボクたち、ありがとうね、本当にありがとう。
「……あのときはすごいびっくりした」日向子がようやく口を開いた。

「自分たちの行動が、全然知らないところで、誰かの心に影響していたなんて、今考えても、怖い」

「怖い？ と僕は聞き返す。」
「ええ、怖いわ。もちろんあのおじさんを救えたことはうれいけど、でも、裏返せば自分のあずかり知らないうちにほかの人を傷つけたりしている可能性だって、あるわけでしょう？ ただでさえ私たちは周囲の人をたくさん傷つけているっていうのに」

僕はうなずいた。もつともな意見だった。

「私、知ってるよ、人をずたずたにする方法」日向子は目の奥にべつ甲のような深い光をたたえて、言った。

「自分がしあわせになつてしまえばいいの、それだけ」

*

夕食後、二人で飲むことにした。日向子は僕の部屋に入るなり、まだこたつがしまわれていないことに驚き、でも男と女が床であぐらをかいて飲み交わすよりはいいよね、と笑った。相槌を打ちながらこたつの天板に缶ビールとつまみを置き、FMラジオのクラシック番組をつけると、テレビもパソコンもない、殺風景きわまりない室内にすずめの涙ほどであるが奥行きがもたらされたような気がして、僕は少し安堵した。今流れているのはチャイコフスキーの弦楽セレナーデだと日向子は教えてくれたが、邦楽洋楽かわらず音楽全般にうとい僕にとって、クラシックなど睡魔そのものである。

プルトップを引くといい音がした。五百ミリリットル缶をぶつけ合ってから、お互いにわき目もふらず飲んだ。一息ついたところで、日向子は僕の木登りをからかった。柿生君が、まるでお猿さんみたいに木の上をひよいひよい移動するんだもの、思い出しても笑えちやう！ と。

日向子は夕方の仕事るとき、僕が木に登って花を摘んでいたことを言っているのだ。果樹農家にとって花粉は貴重なものなので取れるだけ取りたいのであるが、今、せっかく場が和んでいるというのに、そんなことを滔々と説明するつもりはない。僕は愛想笑いを返し、一本目のビールを飲み干した。

話題はいもづる式にやって来て絶え間なく笑いが起こった。しかし、どれもさえない笑いだった。しゃべればしゃべるほど、飲めば飲めば胸の中に澱が溜まり、吐き出す言葉を重苦しくさせた。重苦しさに打ちのめされながらも、僕たちは会話をつづけた。それ以

外に選択肢は与えられていないような、そんな錯覚にとらわれていた。

午前零時をまわったころだった。トイレに行つて帰つてくると、日向子が肩を小さくふるわせていた。一目で泣いているのだとわかった。

「六月に、結婚するの」と彼女は涙声で言った。
「でも苦しいの、とても苦しい……」

親友の恋人を奪つたのだそうだ。嫉妬心やいたずら心が働いてのことではない。いたつて自然ななりゆきだった。どこでどういうふうに彼に好意を抱いてどこでどういうふうに関係を持ったのか全然わからないのだという言葉が示すとおり、日向子はいまだに、なぜこんなことになつてしまつたのか、なぜ親友を裏切つたりしてしまつたのか判然とせず、混乱の渦巻く中にいるみたいだった。

男は、日向子より五つ上で、高校の非常勤講師のかたわらイラストレーターを目指しているらしい。

「ときどき絵に詩を添えてプレゼントしてくれるの」
イラスト。詩。僕には及びもつかない世界だった。イラストは漫画の延長線上にあるもの、詩は小説から切りとつた断片、そんなふうにしか考えられない僕は、なにか言おうと思つても、頭がぼんやりして、鉢の中の金魚よろしく口をぱくぱくと開けたり閉じたりするのみであつた。日向子はしばらくの間、濡れたまなざしで僕を射ていた。夜会はしんみりしたままおひらきとなつた。

明け方に、となりの部屋からすすり泣く声が聞こえた。それはまるで風に流されていく梨の花びらのようだった。日向子をこれ以上悲しませたくない、と思つた。僕にできることはないだろうか、と考へた。僕は、足音をたてないよう注意しながら、部屋を抜け出した。

*

「おーい、起きろー！」

僕は外から母屋の二階に向かつて声を張り上げた。何度も呼びかけていると、日向子の部屋のカーテンが開き、そして窓が開き、まばゆい朝の光に双眸を細めながら、寝不足気味の彼女は顔を出した。しかし、すぐにはなに行われてはいるかわからなかつたのだろう、いぶかしげな表情でじつとこちらをうかがつていた。

「なにしてるの！」やがて日向子は言つた。悲鳴に近い声だった。「ひさしぶりに絵を描いてみたんだ。題名は『梨の花』だ」僕はペンキで重くなつた刷毛を掲げた。

「なかなか悪くないだろう？」
「そういう意味じゃなくて、危ないよ」

僕は長屋の屋根の上に登っているのである。日向子の部屋からよく見えるよう、瓦一面に特大アートを実践したのである。梨の木を一本、大きく描き、風の流れる方向へ白い花びらを散らせた。たまたそれだけなのに結構時間がかかった。朝日がさんさんと輝いて、思いのほか瓦の照り返しが強い。Tシャツはもう汗びっしょりだ。父と母が見たら腰を抜かすかもしれない。でも、そのうち雨が降ればきれいさっぱり洗い流されるだろう。時は進む。少しも振り返ってはくれないのだ。

「柿生」日向子は、はじめて僕を呼び捨てにした。

「――ありがとう」

「まあ、おまえの彼氏みたいには、うまく描けないけど」素直によろこべないのが、もどかしい。

「ううん、すごく上手だよ。本当にありがとう」

「何回『ありがとう』を言うんだよ。いつかの、あのおじさんみたいだな」

「……あの人、今ごろなにしてるのかな？」

「きつとしあわせに暮らしているさ」僕はきっぱりと答えた。たとえ確信がなくても、言いきることで確定される、救われることがある。

「うん、そうだね」日向子はうなずいた。

「私も、そう思う」

朝だというのに母がかなり張りきってこしらえた朝食を全部平らげたあと、日向子は額がテールブルにくつつかんばかりのお辞儀をして、これから祖父母のところに行く旨を告げた。僕が家の前まで見送りに行くのと、日向子は、なにか言いたいことがあるのかその場で恥ずかしそうにした。目で催促する僕に、笑わないでね、と一言釘を刺してから、アスファルトの上に旅行鞆を置き、深呼吸を行い、軽くジャンプを繰り返した。そして子どものように「けんけん」をはじめたのである。けん、けん、けん、ぱっ！けん、けん、ぱっ！一回、力強くつぶやきながら。

けん、
けん、
ぱっ。

僕は今にも泣きそうだった。

けん、
けん、
ぱっ。

「見て！」日向子は、つづけながら言う。よりいっそうはずんだ声で。

「すごいでしょ！　すごいでしょ！」

左足に体重がのしかかるたびにひやりとするが、しかし立派なものだった。僕は拍手を送った。間欠的に込み上げてくる嗚咽にはばまれて、なにも言えなかったからである。ちようどこの位置から鳥影山が見える。プロペラ型の風車が三基、中腹よりもやや上のあたりで、日向子を応援するかのようにせわしなくまわっている。今日も快晴だ。

「ねえ」そう言って、日向子は立ち止まった。

「一つお願いがあるんだけど、いい？」

僕は首をひねった。

日向子は胸に手を当てて息を整えた。彼女の動悸がおさまるのに合わせて、あたりはしんと静まり返った。

「柿生」

「うん」

「あのね、」

それは——まったく予期しない言葉だった。